

4-9 災害を経験してわかること

自然災害にはそもそも素因があって、それに誘因というのが加わって起きることになります。素因は怖いからあまり知りたくないし、誘因には嫌悪感や自責の念が関係するようであまり聞きたくないというものです。しかし、被害を少なくするということから、根本的なことに対応をしないと再発したり状況を悪化させたりということで、我々の身体に似たところがあります。最近自然災害はかつてよりも発生の頻度が多くなっているように感じますし、被害の規模も大きくなっているような気がします。そして、この自然災害は、予測不能で突発的で、どのような被害や障害が出るのか全く予想できません。加えて、二次被害もあるわけですが、いつも敵を見守っているというわけにもいきません。リスクは、一般的には発生する頻度とその被害の規模で示されますが、そのどちらも大きくなる傾向があり、その背景には地球温暖化による気象の変化であったり、我々の土地利用に関係していたりということで、社会の変化、生活パターンにも深く関係しています。防災は安全、安心かつ安定な環境を維持するためのもので、その基本は地盤であることは明白ですが、街づくりにしてもいま盛んに言われる地方創生というような場面でもメインのキーワードにはなっていないようです。

スマートシティや立地適正計画というところで、施策の一要素として取り上げられてはいますが、実は自然災害への対応こそがあらゆる施策の価値化を図っていくための構想上での基本資源でないかと思います。

未来の都市は、環境的にも価値があるもの、社会的価値のあるもの、経済的価値のあるものが相互に成り立っているようなものが目標になるわけで、防災ということも教育や医療・福祉等といったものとともに生活する上での基盤として検討されるものです。コンパクトシティといった新しい考え方の地域の形成に関しても、住宅、地域公共交通、中心街活性化というような多様で総合性が求められる施策でも防災は極めて重要です。そして、対象となる地域のほかにもその後背地、流域といった広域での視点からの防災を検討しておく必要があると思います。例えば、地盤の上にある建物やインフラが健全でなければ、あらゆるものが成立しないわけで、そのような構造物が支持されていることは重要ですが、その地下にあるリスクに無関心すぎるような気がします。地震や豪雨といった抑止することが不能な外力が加わった時に、どのような地盤への変化があるのかというところにまで配慮されていないと、本当の安全は確保できません。実際に、大きな地震動で液状化、沈下、支持力の低下というようなことが起きて、建物が支持されず倒壊や傾倒するというようなことが起きています。地方創生というような未来を決するような施策を実行するときには、常に防災ということを中心に置いて検証するというのをしないと、計画の実践が無になることすらあるということを考えておかななくてはならないように思われます。地盤という当たり前すぎるものが対象だけに、あまり関心が向けられない向きもありますが、その重要性にも気づいてほしいと思います。